

特集

保育学の魅力を社会にどう発信していくか

学問としての保育学や実践としての保育の営みは、大いなる魅力に溢れている。学術研究領域としての保育学は、教育学・心理学・福祉学・保健学・家政学・芸術学・政策学など、多様な学際性に富んでいる。乳幼児期の子どもの健やかな育ちを促し、地域の子育てを支援する保育の営みは、その都度の文脈の中で最善の判断を行い、関係性を読み取りながら行動する総合的な知の営みでもある。保育学研究者や保育実践者は、私たちの仕事の魅力を社会に向けて、どのような言葉で表現し発信できるだろうか。

今回は、保育学の魅力を社会にどう発信していくかという問いに対する論者の声に耳を傾けてみよう。

保育学的知性の位置

川田 学

保育学の魅力は、子ども理解のひとつの構図を提出しようところにあるとおもいます。保育学は、学際的ではありますが、かといってドーナツのように中心のないものではないとおもいますし、それではいけないのだからとかがえています。保育学の中心は子ども理解の理論と方法に関する議論であり、いわば「保育学的子ども理解」というものを、世に問うているのではないのでしょうか。

保育学の魅力をかंगाえるために、心理学と比較してみます。私の出自は発達心理学ですから、方法的には心理学の作法を訓練されました。「心理学の過去は長く、歴史は短い」といわれます。心理学は学問としては比較的新しい領域ですが、人のところについては、われわれの祖先は何十万年か何百万年か、皆ずっとかंगाえてきました。心理学というのは、人類のこのところの理解史における限定的なひとつの方法にすぎません。それは基本的に、自然科学的な認識論にもとづき、社会へのメッセージは自然科学の文体で表現されます。ひとつひとつによる日ごろのこのところの理解とはことなる方法なので、それが目新しかったり、意外だったり、ときには受け入れがたかったりします。そこに心理学の立場もあり、魅力ともなっているとおもいます。

保育学はどうでしょうか。保育学の方法とはなんで

しょうか。ひとつの日常的な感覚や認識に新しい風をふきこむ学知としての特異性はどこにあるのでしょうか。私は心理学の世界から保育実践の世界にとびこんで、保育という思想と保育学の魅力に出会いました。そして、心理学的知性の限定性をいやおうなく自覚することになりました。とはいえ、心理学を根本的に変えようとか、方法論的に転回すべきだとはかंगाえません。心理学は、基本的に自然科学的な人間理解の体系を構築しようとしているだけであり、それじたいはひとつの作法として確立されていくべきものです。ときにそれが誤解されて、心理学でもって保育のなかを生きる子どもや保育者が理解できるかの向きもあるようですが、それは控えめにかंगाえたほうがよいとおもいます。心理学による子ども理解は、保育という営みに合わせて仕立てられていません。保育には、保育に合った服を仕立てるための理論と方法を備えた知の体系が必須で、それが保育学の一大目標だとおもいます。

近年、保育や乳幼児理解について広範な影響力をもっているのは、市場ないし経済学の文体ではないのでしょうか。いわゆる投資効果論であり、幼年期への投資がもっとも回収率が高いといったものです。経済が停滞する時代には一見抗しがたい論理ですが、こうしたマクロな文体だけで子どもをみる目が完結してよいとおもえません。いっぽうで、実践者が日々生み出す実践的子ども理解があり、それはミクロな文体としてエピソードや実践記録にしたためられます。これもまた検証のために開かれている必要があります。保育学は、社会経済的なマクロレベルと、日々の実践のミクロレベルのあいだに、厚みのある緩衝帯を構築する役目があるのではないのでしょうか。マクロによってミクロがいたずらに左右されないように、またミクロがミクロで閉じないように、そのあいだで、時流というものに対するある種のにぶさをもった知的実践の層をつくること。それが保育学に期待されることであり、また社会にとっての本質的な魅力たりうるのではないかとおもいます。

●Profile

川田 学 (かわた まなぶ)

北海道大学大学院教育学研究院 准教授

研究関心のひとつは、乳幼児期の自己意識と他者理解の発達連関です。いまひとつは、心理学的子ども理解・発達理解と保育実践における子ども理解との関係史です。後者は目下勉強中。陽の目をみるのは数年先か、十年先か。じっくり取り組みたいとおもっています。

保育の楽しさにつながる集団保育における「集団の力」

渡辺 桜

主題にある「社会」を、まずは保育関係者（現任保育者、潜在保育者、保育者養成校の学生・教員・研究者）と捉える。そこから子育て家庭等に波及していくことで、広く「社会」が保育学の魅力を認知すると考える。それを踏まえ、以下、筆者の実体験を基に考えを述べたい。

筆者が保育者として勤務し始めたおよそ20年前は、保育所保育指針や幼稚園教育要領の改訂により、「子ども一人ひとりに寄り添って」「子どもの内面を理解して」といったことが重要視されるようになる大きな変換期であった。それ以降、子ども一人ひとりに寄り添うために、「気になる子」についての記録を書き、園内研究で議論をする機会は多く、現在でも保育者にとって「気になる子」や「気になる場面」に焦点化した記録検討が多く見られる。どのようなかわりをしたら良かったのかという議論の先には、「子どもの気持ちに寄り添うことが大切」「どのようなかわりが良かったのか振り返ることが大切」「保育に答えはない」といった漠然とした精神論でくくられることも少なくない。

一方で、保育実践を成立させている状況は、集団保育における物・人・場の関係性であり、個々の子どもや、子どもと保育者とのやりとり、その子がかかわっている限られた場面だけに注目しても、根本的な保育課題の解決にはつながらない（渡辺、2014）。また、安全保障や援助の優先順位を考えるために「全体を見ながら一人ひとりの子どもに寄り添う」という集団保育だからこそその保育の難しさがある。しかし、その難しさと向き合いながら保育の楽しさを得ていくことは不可能ではない。

現在、筆者は、保育者養成校に勤務しながら園内研修や公開研修の講師として保育現場にかかわらせて頂いている。小川（2010）の遊び保育論に従い、子どもが主体的に遊ぶことのできる環境（拠点性、見る一見られる関係性等）や援助（保育者が遊びの仲間としてかわりながら見る、同調性、応答性等）についてこれらの共通言語を用いながら、保育者の方々と日々、共に悩み、時には喜びを共有している。喜びが共有できる時は、保育者が自身の悩みの要因となっている環境や援助について具体的に気づき始め、保育が楽しくなってきた時である。そしてそれは、同時に、クラス集団の一体感や同調性、保育者とクラスの子どもの間の応答性の高まりと連動している。これまでお集まり場面で浮遊していた「気になる子」が楽しげにわらべうたや手遊びに参加するようになると、自由遊び場面でもよく周りを見て、自ら物・人・場にかかわるようになったという実践

にいくつも出逢ってきた。それは、保育者との応答性、子ども達との同調性の高まりと、見る一見られる関係性を可能にする環境が関係している。これは、集団保育だからこそ可能になるものである。楽しそうな同調や応答、クラス集団の一体感、つまり「集団の力」によって、「気になる子」が思わず同調してしまうということである。

集団保育は難しい。しかし、保育研究者や保育実践者がそこに向き合い、その難しさを乗り越えていく理論＝共通言語を用いることで、集団保育における「集団の力」と保育の楽しさとのつながりが「社会」と共有できる。そしてそれが、より広い「社会」への保育学の重要性和魅力の発信となり得るのである。

[参考文献]

- ・小川博久（2010）遊び保育論。萌文書林。
- ・小川博久（監修）吉田龍宏・渡辺桜（編著）（2014）遊び保育のための実践ワーク―保育の実践と園内研究の手がかり―。萌文書林。
- ・渡辺桜（2014）集団保育において保育課題解決に有効な園内研究のあり方―従来の保育記録と保育者の「葛藤」概念の検討をとおして―。教育方法学研究，39，37-47。

●Profile

渡辺 桜（わたなべ さくら）

名古屋学芸大学ヒューマンケア学部 准教授

研究テーマは、子どもが主体的に物・人・場にかかわる保育環境と援助、保育者同士で保育の質を高めあえる園内研修・公開研修・現職教育。子どもも大人も楽しくなる子育て等に関心をもっている。

発信し開くことから生まれる協働

加藤 篤彦

本園は東京都武蔵野市にある創立52年の学校法人立幼稚園である。創立当初に受け入れた自閉症児の生活が安定したことが広まり、多くの自閉症児が入園する園となった。その後自閉症児たちの成長に伴い、幼稚園から小学校、中学校、高等専修学校を生み出し、自閉症の方の就労・定着支援、グループホーム運営も行う総合学園となった。通常学級の子どもたちと育ち合う「混合教育」は本学園の教育の大きな柱である。今日的にいうインクルーシブ教育を創立以来続けてきた。

この教育の質の向上のためには、「混合教育」への理解と支援が欠かせない。私はかつて、真面目に保育をしていれば、育った子どもたちの姿を通して、この教育の大切さを「皆」が分かってくれるものだと思込んでいた。ところが（20年以上前だが）未就園保護者の案内中に、「御園は多様な幼児を受け入れていますが、それはレベルの低い教育をしているのですか？」との質問を受け、冷水を浴びた

ような思いをしたことがある。黙っていても「皆」に伝わるという私の勝手な思い込みが崩れた瞬間であり、同時に「伝える」ことの大切さを思い知らされた機会でもあった。

考えてみれば分かってくれるはずの「皆」とは、漠然と括られるものではない。その対象は在園や未就園の保護者であり、地域の方々、行政の方々、政治の方々、子育て支援に携わるの方々、小学校の先生方などという具体的な相手である。幼児教育の大切さや素晴らしさを伝えることは漠然としたものではなく、「だれに伝える」から始まり「いつ」「何を」「どのように」まで、それぞれを明確に意識し、対象に合わせて語ることである。

保育は見えにくい営みである。だから「伝える」ためには、保育を「見える化」する取り組みが必要である。一例として「混合教育」を伝えるためには、実際の子ども同士のかかわりから育つ姿を画像を通して可視化し、そこに教師のコメントを加えるなどして紙面にまとめている。そして来園者に分かるようにクラスごとに掲示すると共に、元になる情報は、HPやクラスだよりも利用し、対象を意識して再編集しながら発信している。

発信すれば反応がある。実は伝えることはゴールではなく、相互に開かれたコミュニケーションの第一歩。伝えることで理解され、支援や協働へと展開していく。

本園には保護者の特技を活かしたボランティア活動がある。「○○したい方はこの指止まれ」方式で、クラス・学年関係なく集まった方々が、園内を歩き交い協働してくださる。例えば「あったかポトフ」(素材の味を活かし合うの意)というサークル活動がある。自閉症児の親が通常学級の親に保育現場を案内しながら、「基礎的環境整備」や「合理的配慮」を伝える企画や茶話会などがあって、互いに子育てを楽しく語り合う。保護者が直接子どもが育ち合う場にかかわることで、それぞれの子どもたちの育ちが幅広く理解されてくる。

幼児と共にいる生活の楽しさと喜びと成長への畏敬は私たちの原動力である。幼児教育の意味を子どもの育つ姿を画像を通して具体的に発信する。また同時に、園を開くことも発信である。気軽にボランティアとしてお越しいただくことで、教師と保護者、保護者同士が情報を共有し合い、ここに子どもを中心とし新たな学び合いと協働が生まれてくるからである。

●Profile

加藤 篤彦 (かとう あつひこ)
学校法人武蔵野東学園 武蔵野東第一・第二幼稚園 園長
自閉症スペクトラム児を幼児期から受け入れ社会自立をするまでの一貫教育と、定型発達児と育ち合うインクルーシブ教育に取り組んでいる学園の幼児教育を担当している。

「保育学」の何を発信していくか

古賀 琢也

社会から保育に関する仕事はどのように捉えられているのだろうか。保育士をしていることを知人に話すと「たくさんのおこもを一日中、毎日預かるなんて大変だね」「こどもと遊んでいるんでしょう」という答えが返ってくる。「保育」の仕事に関して大事なところが伝わっていないのだと痛感する。仕事の魅力よりも「大変さ」や、「誰でもできる」という印象が先に出てくるのである。

もちろん大変なことはある。こどもの命や日々の生活を預かっていることは大前提である。しかし保育とはこどもをただ一日預かるだけのものではない。そこにはこども個々の、そして集団の成長がある。成長は保育の環境次第で大きく変わる。その環境のひとつとして私たち保育士が在る。それこそがこの仕事の難しさであり、喜びであり、醍醐味なのだ。日々、こどもとかかわる保育士の経験と知恵がその時、その子にどうかかわるかを導き出す。保育の仕事は職人の仕事なのだ。

そして研究者の存在が保育をさらに深める。言葉に表しにくい保育を言語化したり、時に保育の凝りをほぐし、違った視点に気づききっかけが得られたりする。

保育の実践と研究が織り成す「保育学」をどのように社会に発信していくか。修士課程で保育を学び、その後6年間保育士として保育に携わった自分自身の気づきから、この問いに向き合ってみよう。

修士課程では未知の自然の出来事にこどもたちが出会ったとき、どのようなことを話し、解釈していくのかを研究した。研究あるいは講義、文献から学ぶことは面白く、自分なりに保育に関する知識や理論を増やし、現場に臨んだ。研究や文献からの示唆や理論があってこそ保育が良くなると思っていた。

現場に出て4年目に、逃げ出したいほど大きな挫折を経験した。クラスのこどもは楽しそうではなく、話を聞かない子、指示を待つ子がどんどん増えていった。大人の考えるこども像が先行し、理屈ばかり保育を考え、動かそうとしていたことが原因ではないかと気づいた。

どうすることがこどもにとって良いのだろうか。今までとは少し質の違う「問い」が立った。先行研究や文献を当たってみても仕方がない。これまでの自分の理屈を捨て、目の前のこどもたちと接し、感性の振り子を大きく振る。それに尽きた。見えてくるものが変わり、自分の動きが変わり、こどもの顔つきが変わった。

ふとしたことに興味や不思議を感じる心、自信を持たず不安定な心があれば、壁を越えて大きく躍動する心がある。その子は今、何を感じているのか、

どのように葛藤を乗り越えようとしているのか。それら心の揺れに気づき、共感する。一緒に大喜びしたり、腹を立てたり、哀しむこともあれば、楽しさが止まらないこともある。

そして、こどもの「変わりたい」という願いに、時に手助けをする。こどもたち、その状況はひとつとして同じではない。今どうするかというその時の判断は、これまで、今、これからのこどもの姿に照らして初めて考えることができる。

具体的な場面になると保育における見解、判断は何通りもある。しかし、「こどもたちは何を感じ、どのような自分になりたがっているのか」「そのために大人に何が出来るのか」を問うという保育学の姿勢は共通しているのではないか。そうすると「保育学」が発信していくのはその研究の成果や示唆だけではなく、こどもの感性に寄り添うための問い方、考え方のエッセンスこそ求められるのではないだろうか。

●Profile

古賀 琢也 (こが たくや)
文京区立お茶の水女子大学こども園 保育士
生活を通して、こどもたちが地域、自然、文化などどのようにつながっていくかに関心を持っている。こどもたちとの日々のやり取りからどのような保育が展開していくか問い、考えている。

運動遊びの魅力

黒原 貴仁

近年、遊びから学びに生活の中心が変わり、幼児教育から小学校教育へ指導が一変する段差を乗り越えられないため起こる「小1プロブレム」が教育現場で大きな課題となっている。また、5歳児からの義務教育化も検討され始めており、保育所や幼稚園と小学校の保幼小連携を図る取り組みがますます重要視されている。

運動場や体育館が学習の場となる小学校体育授業においても、小1プロブレムは深刻な問題であり、児童らの安全面への配慮や運動遊びの学習成果について、現場の教師が苦慮していることは想像の範囲である。また、保育所や幼稚園においても、年長児になるにつれ、運動する子どもとほとんど運動しない子どもに分かれる二極化現象が生じていることが、職員研修会の講師として某保育所を訪れた際、保育者と談話する中で確認することができた。

文部科学省は、2012年3月に「幼児期運動指針」を発表した。それに伴い「幼児期運動指針ガイドブック」等が全国すべての保育所、幼稚園に配布された。この事柄も画期的なことだと思うのだが、内容も実に興味深いものである。そこには、「体力・運動能力」の発達は、日常生活習慣と密接な関係を持っており、心や脳の働きに関連する「認知的機能（意

欲・集中力・積極性・自己統制力・社会性)」の働きにおいても体力・運動能力と密接に関係していることが明らかにされた。また、小学5年生、中学2年生を対象として行われた「新体力テスト」と生活、食、運動習慣等の質問紙調査の結果から、「体力」と「学力」には正比例的関係があることが明らかにされた。今後、「心」「体力」「学力」「生活」は、ますます緊密化が図られ、幼児期の運動発達の重要性はこれまで以上に増していくと推察される。

現在、筆者は小学校・幼稚園教諭および保育士養成校に所属しており、昨年度から保幼小連携を図る目的で幼児期の運動遊びを中心課題とする授業科目を担当している。授業では、幼児期の運動発達の様子や運動遊びの重要性を教授した後、グループで話し合いをし、実際に対象年齢の子どもの運動遊びを考えるとという内容である。この授業で最も大切にしていることは、「なぜその運動遊びを提供するのか？」であり、自らの言葉でその目的を説明できるように構築させている。学生らは当初、「楽しいから」や「面白そうだから」という漠然とした理由で運動遊びを考えているのだが、次第に「〇〇の能力を高めたい」や「〇〇の動きの習得を目指したい」など、より具体的に運動遊びの意義について考えるようになった。授業終了後、学生の感想文で「指導者として、運動遊びを構築することはとても難しかった。しかし、子どもの成長していく姿を想像しながら内容を考えていくと、ワクワクしてきて嬉しくなった」と書かれていた。

運動遊びとは、もちろん強制されるものではないと考える。しかし、ただ自由に楽しく遊ぶだけでは必要な動きの習得はできない。したがって、指導者は運動遊びの中で子どもに身につけさせたい動きを発揮できるような様々な工夫を施すことが求められる。そして、子どもの運動に関するより多くの情報を共有し、動きの習得の評価を容易に可視化できるシステムの構築、さらに、子どもの運動における成長を子どもに関わる全ての保育者が把握することができれば、子どもはもちろん、我々大人も共に成長していくことができるのではないだろうか。

上述したような子どもの成長を想像し、自分の喜びとして捉えられる学生を育てていくことが、養成校の使命でもあり、同時に保育学の魅力を社会に発信できるひとつの手立てになるのではと確信している。

●Profile

黒原 貴仁 (くろはら たかひと)
鹿児島女子短期大学児童教育学科 講師、鹿児島大学 非常勤講師
体育科教育学を研究分野としており、小学校体育授業（ボールゲーム）について研究している。また、幼児期の運動能力・体力や保幼小連携についても関心がある。

保育の魅力を手で感じられるイベントの開催を通して

佐藤 智朗

先日開催された講演会で、「キャベツを包丁で切る場面を想像してみてください」と講師が言われた。会場にいた約200名のほとんどが「想像できた」と手を挙げた。筆者は、半分のキャベツを千切りにしている場面を、音や手応えまで想像していた。身体で覚えた感覚は、ストックされ、他の経験と結びついて、想像の世界を広げることができる。「身体感覚を伴う多様な活動を経験することによって、子どもは豊かな感性を養うと共に、生涯にわたる学習意欲や態度の基礎となる好奇心や探究心を培う」とも言われている。

筆者は、保育者養成課程の造形表現領域における授業の成果を利用して、上記のような経験を促す活動を地域に提供、発信している。以下では、その取り組みについて紹介する。

お店屋さんごっこ大会

「保育表現技術・造形Ⅱ」の授業において、学生の造形的技量を高めることを目的に「お店屋さんごっこ」を題材として取り入れた。当初は、廃材を利用して商品を作り、展示ホールに展示（12月）して学生間で観賞していた。新聞で紹介され、地域の親子が来られるようになり、学生の作った商品を使って、暖房もない展示ホールで、何時間も遊ぶ親子の姿も見られた。子どもがどのようなお店や商品に興味・関心があるのかというよりも、大人の感覚から見栄えを気にして制作をする学生がいたこともあり、学生に子どもの視点を理解させるために、直接子どもと関わりを持てる「お店屋さんごっこ大会」を開催し、お買い物ごっこの機会を地域の子どもの提供することとした。

子どもにとって、後ろから保護者が温かく見守ってくれているという安心感の中で、自分で商品を選び、初対面の学生に買い物券を渡して商品を受け取るという経験は、貴重なものになると確信している。

わが子の成長を、目を細めて後ろから確認している保護者が多いが、中には、子どもそっちのけでお買い物ごっこ（商品選び）を楽しんでいる保護者もいた。お買い物ごっこの経験（記憶）がない保護者にとっては、お買い物ごっこの楽しさを追体験する機会となり、持ち帰った商品で、親子でお店屋さんごっこを楽しむきっかけになっていると信じている。

子ども総合研究発表会

地域の幼児（親子）を対象に、人形劇や劇、音楽や身体表現など、学生による発表会を毎年開催している。生の舞台に、釘付けになっている子どもの瞳は、きらきらと輝いている。

他方で、舞台を観ずにスマートフォンを操作し続

けている保護者の姿が目立つようになってきた。怖い場面や面白い場面で、「大丈夫だよ」とか「面白いね」という頷きを期待して、子どもは保護者の顔を見る。しかし、目が合わず頷いてももらえない子どもは、安心してお話の世界に入り込めなくなってしまっている。子どもは、見守ってくれている信頼できる大人がいて、一歩前に踏み出すことができる。

幼児期にしかできない経験をしっかりと保証することが保護者や保育者、そして社会の役割ではないだろうか。保育学の魅力が社会に発信するためにも、保育の魅力を手で感じられるイベントを開催して行きたい。

●Profile

佐藤 智朗（さとう ともあき）

山口芸術短期大学 教授

土粘土・木片・新聞紙・段ボールなどの造形素材やペーパーサート・パネルンアター・紙芝居などの表現媒体を保育に活かす実践研究をしている。また、学生と人形劇を創作し、生の舞台を子どもたちに観てもらおう活動を行っている。